

当センターは、国の機関として障害者リハビリテーションの中核機関としての役割を担っておりますが、一方で所沢市に所在する施設として、地域の中で、自治体・関係団体、ボランティアなど、さまざまな方と関わりを持ちながら事業を展開しています。国リハニュースでは今月号より数回にわたって、「地域の中の国リハセンター」と題して国リハセンターと地域との関わりについて紹介いたします。

〔特集～地域の中の国リハセンター〕

## 所沢市障害者週間記念事業への協力

管理部企画課

当センターの所沢市障害者週間記念事業への協力は、平成19年度に埼玉県・所沢市・埼玉県障害者協議会主催の障害者週間記念事業が所沢市民文化センターで開催され、これに協力団体として参画したことを契機として始まったものです。

20、21年度に引き続き、今年度も、12月6日から9日までの4日間、所沢市役所1階市民ホールにおいて、所沢市障害者週間記念事業として障害者の作品展等が開催され、当センターもこれに協力、出展を行いました。

本年は、センターの事業を紹介するパネルの展示に加え、国内外から収集した認知症のある人の福祉機器を展示して、市民の皆さんに実際に機器を見て、触って、体感できる機会を提供しました。展示した物は、「スケジュールボード」(1日のスケジュールを掲示板でお知らせする)、「アラーム付き薬入れ」(服薬の時間を伝えてくれる)、「探し物発見器」(探し物をアラームで教えてくれる)、「電話機」(ボタンを1回押すだけでかかる電話機)など約20点です。

中でも来訪者の目を引いた機器は、「認知症者の自立行動を促すロボット」です。これは、コミュニケーションロボットの一つであるNEC製のPaPeRo(パペロ)を活用して、認知症者向け対話型情報支援システムとして当センター研究所福祉機器開発部を中心とした研究グループが開発したもので、展示

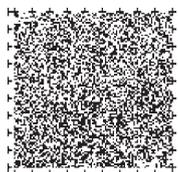
コーナーを訪れた人たちは、研究員の説明を受けながら、実際にこのロボットとの対話を楽しんでいらっしゃいました。このロボットの詳細につきましては、平成22年8月23日付け報道発表資料

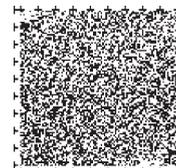
[http://www.rehab.go.jp/hodo/japanese/news\\_22/news22-03.html](http://www.rehab.go.jp/hodo/japanese/news_22/news22-03.html)でも紹介していますのでぜひご覧いただきたいと思ひます。

今年度は、こうした展示に加え、当センター秩父学園及び国立職業リハビリテーションセンターにも呼びかけを行い、合わせて施設の紹介を行いました。秩父学園は、利用者の作品の展示のほか、パネルを使って所沢市立松原学園との事業連携について紹介を行いました。なお、この事業の詳細は、今月号の特集記事「地域の中の国リハセンター 秩父学園と所沢市との連携」で紹介しております。

期間中は、多数の市民の方にご来場いただいたほか、当摩所沢市長も当センターの展示コーナーを訪れになり、機器の一つ一つを手にとって体感されながら研究員の説明に熱心に耳を傾けていました。

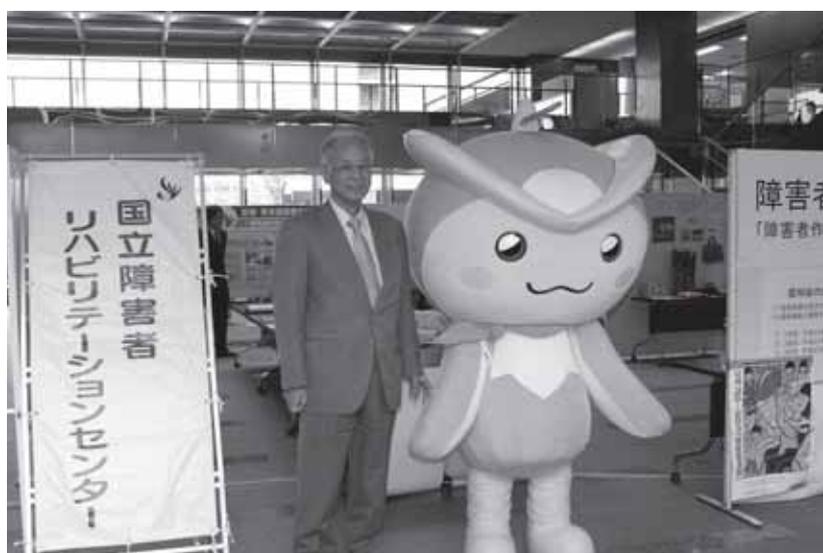
こうした事業を通じて、広く市民の皆様当センターを身近なものに感じていただき、活動内容について理解を深めていただくことは、センターの発展のためにも大変重要なことであると考えております。今後とも地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。



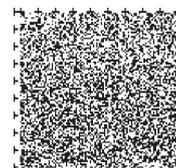


展示コーナーの様子  
(所沢市役所一階市民ホール)

所沢市のイメージマスコット「トコロん」も駆けつけてくれました  
(岩谷総長と)



当摩所沢市長もセンターの展示コーナーを訪れ、PaPeRoとの対話を体験されました



# 秩父学園と所沢市との連携

～発達障害を持つお子さんのスムーズな就学移行に向けて～

秩父学園 齋藤新一

秩父学園は所沢市にある重度の知的障害児入所施設です。所沢市近隣の就学前の自閉症領域のお子さんが週1回通園する通園部と発達診療所もあります。通園するお子さんの対応については、発達診療所で診察を受けて発達の評価をしてから療育計画をつくり、それに沿って支援をします。

この秩父学園の通園部に、同じ所沢市内にある知的障害児通園施設所沢市立松原学園に通う自閉症領域のお子さんが通園していました。平成19年度まで両学園に通園するお子さんは、秩父学園と松原学園でそれぞれ別に作成された個別療育計画に基づいて療育支援が行われており、十分な連携が図れていませんでした。このような状態はお子さんやその保護者の混乱や不安を招きかねません。

そこで秩父学園と松原学園は、お子さんのより良い発達支援を図るために

両学園で統一した支援を行うために必要な共通の関係書類の作成

秩父学園と松原学園で統一した療育支援の実践  
就学前療育情報を次の学校教育へ円滑に引き継ぐシステムづくり

を目的に、平成20年度から22年度までの3ヶ年計画で連携事業を行ってきました。今日までの取り組み状況を報告します。

必要な共通の関係書類の作成

秩父学園、松原学園、所沢市こども支援課・学校教育課・教育センター、所沢市児童相談所の職員により2つの関係書類を平成20年度に作成し、平成21年度より両学園で共通の個別療育計画書をつくり支援を開始しました。

共通情報シート関係書類

これは、一人ひとりのお子さんの生育歴・医療情報・福祉制度利用・療育訓練結果・発達検査結果等16項目について記載し、誕生から学校教育、そして青年期の生活に継続して引き継げる本人情報シートや、個別療育計画を立案するために必要な情報を収集する「聴き取り用紙」などから成っています。

個別療育計画関係書類

これは、2つの療育機関が連携して統一した発達支援を行うために、双方で共通して使用する個別療育計画書等であり7種類から成っています。

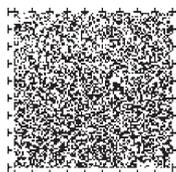
統一した療育支援の実践



保護者・秩父学園・松原学園で共通情報シート関係書類をベースとして、双方の学園で共通に使用する個別療育計画書の立案・作成と実施です。



職員の専門的スキル向上の取り組みとして、  
・秩父学園と松原学園で、自閉症や療育支援に対する共通の認識や支援方法を共有し、統一した療育支援を行うために合同の勉強会の開催。  
・松原学園のスタッフが、秩父学園で開催する現任研修（自閉症トレーニングセミナー）にセミナースタッフ及び受講生として参加しました。





例) 視覚的コミュニケーション支援  
秩父学園



松原学園



両学園で共通の個別療育計画による支援を行うのですが、先行して秩父学園で支援を開始しました。次に目標達成の支援方法等が確立したところで、松原学園も同じ方法で統一した支援を行いました。これは療育支援方法の違いによる、お子さんの混乱を防止するためです。

秩父学園から松原学園へ週1回の定期巡回支援を行い、松原学園の職員に対する支援や助言、お子さんについての情報交換を行いました。また、年度の半期で両学園職員と保護者が集まって、個別支援計画の見直しのための話し合いを行いました。

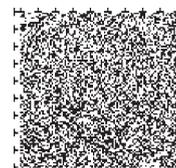
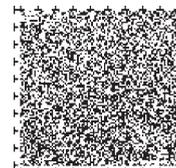
就学前療育情報を次の学校教育へ円滑に引き継ぐシステムづくり  
松原学園と所沢特別支援学校では以前から連携していましたが、今回、これらの連携をベースにして、

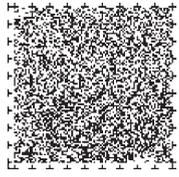
保護者、両学園職員、就学先特別支援学校関係者が参加する就学引継ぎ会議を行い、就学前療育情報を次の学校教育へより円滑に引き継ぐように努力しました。

就学引継ぎ会議で、保護者から家庭生活の状況報告や学校に望むことを話していただき、秩父学園や松原学園の職員からは、お子さんの特性、支援に有効な方法や避けるべき対応などの情報を口頭だけでなく文書化(サポートブックや情報提供用紙)したもので、就学先特別支援学校関係者に提供しました。就学先特別支援学校関係者はこれらの情報を参考に「個別の教育支援計画」を作成していくことになります。

就学引継ぎ会議のシステムづくりには埼玉県教育局特別支援教育課の協力を得ながら進めました。

終わりに、他機関・他職種との連携に於いては、互いの「役割や働きの違い」「業務や勤務条件の違い」「職場・職種による常識の違い」等様々な違いがあることを常に念頭に置くとともに、互いの違いを理解し、相手に対する配慮を言葉や態度に表して伝え、相手を尊重することが円滑な連携につながっていくものと考えます。





# 点字を学ぼう

所沢市立美原小学校 4 年生との交流

理療教育・就労支援部 理療教育課 伊藤和之

## 1. はじめに

本年 9 月 30 日、縁あって、所沢市立美原小学校の 4 年生 86 名を対象として、「点字を学ぼう」というタイトルの総合的な学習のお手伝いをしました。理療教育課の地域貢献の一つとして、有意義な交流ができましたので御紹介いたします。

## 2. 小学校 4 年生と点字

小学 4 年生の国語教科書には、点字に関する読み物と点字一覧表が掲載されています。点字表記には樹脂が使用されており、触り続けても潰れません。五十音、濁音、半濁音、数字、「カラマツノ ハヤシヲ スギテ」と、分かち書きまで紹介されています。

子供たちは授業で目の不自由な人の文字として点字が考案されたことを学びます。夏休みには図書館やインターネット等で自主学習を重ね、その成果を同級生の前で発表していました。

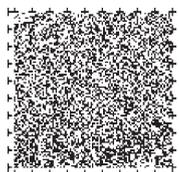
発表に使用された模造紙に「1825年」「ルイ・ブライユ」の文字を見まして、気を引き締めて子供たちに会わねばならないという思いを持ちました。

## 3. 当センター学院 視覚障害学科との連携

点字の読み書きのあれこれを、与えられた 80 分で 86 名の子供たちに効果的に伝えるためには、信頼できる仲間が必要です。

そこで、当センター学院視覚障害学科との連携を図り、指導員を目指す 10 名の学生の協力を得ました。小学生 8 名もしくは 9 名に一人の学生が張り付き、プログラムに沿って指導するグループ学習を採用しました。

そして、点字はローマ字のように母音と子音の組合せで構成されること、点字器で書いて読む場合、表示される点字形は逆向き（線対称）になることなど、点字の構成は 6 個入りの卵パックに 2 色の卓球ボールを入れて説明することにし



ました。

また、子供たちからの質問には、「英語や音楽の点字はどういうものですか」など、高度なものも含まれており、学生にとっても良い復習になると考えました。



卵パックと卓球ボールを活用した教具

## 4. 子供たちのエネルギーに圧倒されて

当日は雨。昼休みの体育館は暗く感じました。

しかし、一転。集合し、グループ活動を始めた子供たちの熱気は一瞬で静寂を破り、辺りには興奮のエネルギーが満ち溢れました。点字盤や点字タイプライターが、子供たちには初めて触れる魔法の筆記具に映るのでしょうか。机に向かう順番を決めるにも我先にと手を挙げ、1 点打つごとに表情が変わっていきます。

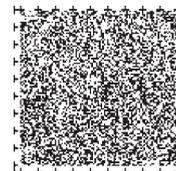
説明をする学生にも自然と熱が入り、和やかな中にも真剣なやりとりがなされました。

音楽用の点字は、学生がピアノの音と説明用の教材を提示して、説明を行いました。教材は力作で、まじまじと見つめる 4 年生たちの姿に、視覚と聴覚に訴える手法の有効性を再認識しました。



体育館に勢揃いした美原小学校4年生

を志す仲間がひとりでも多く現れてほしいというメッセージを送り、学習を終えました。



#### 6. 4年生からの手紙

後日、子供たちからの手紙が綴られた手紙集が届きました。深みは違えど、子供たちに「点字」が刻まれたことがわかり、安堵しました。

本稿が掲載された「国リハニュース」が発行される頃には、私たちの「点字の手紙」が、小学校に届く予定です。子供たちの学びは続きます。

#### 7. おわりに

当センター理療教育課は、授業の一環として、外来の実技協力者（患者さん）を対象としたあん摩マッサージ指圧、鍼灸臨床実習を行っており、日常的に近隣地域の皆様の健康維持増進に貢献する努力を継続しております。今後も、東洋医学分野、中途視覚障害を有する方々の支援に関する情報提供など、広く地域の皆様に役に立つ取組みを行って参りたいと考えております。

最後に、美原小学校倉林校長先生はじめ、第4学年主任関口先生、同校教員の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、当センター病院河野氏、学院小林氏、松崎氏、野口氏、理療教育課江黒氏の協力がありましたことを付記します。



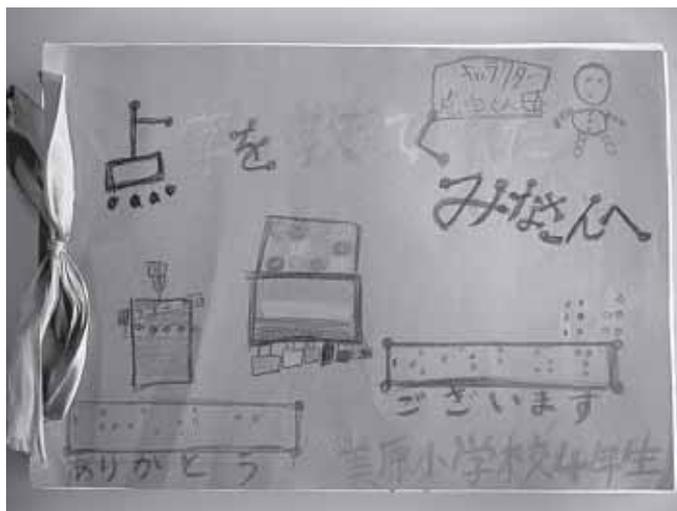
点字の説明に奮闘する視覚障害学科の学生

#### 5. 視覚障害者の文字手段は点字だけではない

子供たちには、「視覚障害者 = 点字」という固定観念を持って体験を終えて欲しくありません。

そこで、現在研究開発中である文字入力システムを紹介しました。キー入力や手書き入力すると即座に音声が出るシステムに、彼らの目が丸くなるのが印象的でした。

最後に、私たちも見えなくなる可能性があること、理療教育在籍者が、死をも考える時間を乗り越え、難しい学業の末に職業人として家族の下に帰ることを伝えるとともに、皆の中からリハビリテーション



子供たちから届いた手紙集

